

舞台批評の行く末

田村良平*

古典芸能を軸とした舞台批評に日ごろ携わっていると、最近とみに痛感することがある。「果たして批評は必要とされているのか」という根本問題である。

むろん、私自身は絶対に必要だと信じてはいる。文化現象の何事においても批評なきところに創造はあり得ない。文化現象の何事においても批評なきところに創造はあり得ない。

もちろん、ジャンルによって本来それが存在しないことはある。例えば茶の湯。これは茶を点てる亭主とそれを喫する客との間でのみ成り立ち「観客」は存在しない。招かれて赴く以上、客は亭主のすべてをありのまま受け容れるのが定めであり、亭主はそれを満了す客を厳しく人選して招く。つまり茶の湯とは、不特定多数に開かれているものではない。席中で活けられる花、点てられる茶は亭主自身の人間存在と等価である。従って、その巧拙や美味不味を評することは許されない。何だろうであろうと、ただありのままを受け止めるのが茶の湯の正道である。とはいえ一歩離れてみれば、投げ入れる花にはおのずから上手下手が

あり、点てられる茶の味わいにも雲泥の差が生じ得る。茶人たるもの、修養を積んで佳き花を活け、旨い茶を点てる手わざを磨かなくてはならない。「ただ何もせず下手でも良い」とは決して参らぬもので、やはりそこには一つの批評眼が光っている。

ましてや、観客・聴衆あってこそ成り立つ舞台芸術はむろんのことである。

新型肺炎および変異株による悪疫猖獗のこの数年、演劇・音楽をはじめ多くの人を集めて成立する公演企画は危機的状況と向き合ってきた。それだけに、役者や制作関係者など発信する側も、時間や金銭を費やして足を運び受信する観客・聴衆の側も、おのずから内向きになっている傾向がある。そうした中、実際の公演代替としてのリモート発信によって、観客・聴衆の日常の中にダイレクトに入り込もうとする試みも増えてきた。これらは何も悪いことばかりではない。

たとえば新国立劇場バレエ団は、二〇二一年五月に予定されていた〈 Coppélia 〉全公演が中止となった際、無料ライブ配信と銘打って無料の舞台中継を敢行した。すると、全四回で延べ二十万人がこれを視たのである。同劇場オペラパレスの席数は一八一四。四回満席でも七二五六人。これに比べれば実に二十七倍以上もの宣伝告知の実を挙げた計算になる。この効果は観面であって、昨年末から今年の年始にかけて同劇場初の長期公演〈くるみ割り人形〉が、大晦日や三ヶ日といった人の出にくい日程を含んで集客が危惧されたにもかかわらず、毎回が上々の大入りに終わった事実からも証明されよう。多くの人を惹き付ける新国立劇場バレエ団の質の高さあつてのこととはいえず、無料ライブ配信は新たな観客層を確実に開拓したのだと思う。

だが、こうした無料配信公演はもちろん常態とはなり得ないし、有料化すれば視聴者はぐっと減る。これと同時に、役者や歌手、ダンサーなど出演する側がさまざまなかたちで観客・聴衆に直接語り掛けるような発信例が増えている。これらは非常事態下に顧客を繋ぎ止める効果を期待するものであるにもせよ、舞台を批評的に突き放して見る視点を誤魔化しかねない逆効果もありはしないか。出演者が欲するのは往々にして「サポーター」であり、「温かい目で見えてくれる、聴いてくれる味方」だ。しかし、悪くするとこれは『ただ何もせず下手でも良い自分』を許容してくれる他者」へ容易にすり替わりかねない。

舞台批評の存在感が薄くなった背景の一つに、こうした問題があるように私は思う。

一昨年秋から朝日新聞の歌舞伎劇評を担当するようになったが、諸外国の演劇批評では通例である初日速評ではなく、掲載日はおおむね中日を過ぎ千種楽も近くなったところで、批評の是非によって客入りに影響しないような興行側（すなわち新聞社にとっては広告収入のスポンサー）への配慮が透けて見える（実際、好評価を記すと客足が伸びるものである）。歌舞伎批評を専門に掲載していた月刊誌『演劇界』の刊行終了も発表された。能楽関係者の誰もが読んでいた月刊紙『能楽タイムズ』の月評担当者の中では、この二十年以上ずっと私が最年少だ。紙媒体がダメならインターネット発信で有意義な批評が見られるかといえは、決してそんなことはない。読み手も減り、書き手も育たない。伝統芸能の批評は風前の灯火といった態である。

惜しくも先日亡くなった中村吉右衛門は常々こう言っていた。「古典の神髄を理解してくれる上質の観客を育てなければ歌舞伎の将来はな

い」。慧眼であり、達人の言である。昨今は何かというプレトークやアフタートークといった舞台解説が付くものの、出演者が説く古典芸能の魅力は多くの場合、「本当は難しいけれど、それには目をつぶって分かりやすく、楽しく」といった遁辞に類する。そうではなく、歌舞伎でも能でも良質の観客への鑑賞誘導は、現代に通用する舞台芸術としての本質的価値や意味を踏まえ、それを説くものでなければならぬ。楽屋裏の苦労話を聞かせたり、能装束や笛や鼓に触らせるような疑似体験は、まったくとは言わぬまでも、古典演劇の真の価値を理解するためにはま

ず無意味であろう。

芸術に接する楽しさは、とりもなおさず「批評する楽しさ」にほかならない。批評の手法、批評の価値を学び、みずから主体的に批評に臨む実践が、学校教育ことに国語教育の根幹に組み入れられることが必要だと私は考える。「実用国語」と称して小手先の実学主義ばかり重んずる文部科学省の昨今の方針は、そんな批評精神を骨抜きにするものだ。そこに豊かな文化の華は開かない。

批評が必要とされない社会は、非文化的な、非人間的な暗黒社会である。そんな将来が到来せぬものか、私は本当に危惧している。